

エコビレッジの事例研究（最終報告）

平山 恵

1. はじめに

本研究の3年間で、奇しくも世界的コロナ禍の中で終わった。ひとつの感染症で、これほど生命の危機、経済危機に陥る社会は「脆い社会」である。エコビレッジはこの「脆い社会」を「レジリエンスのある社会」へ変化させるひとつのダイナミズムであると言える。

エコビレッジとは、お互いが支え合う社会づくりと環境に負荷の少ない暮らし方を追い求める人々が作るコミュニティのことである。エコビレッジという名前から農村のみを想像するかもしれないが、都市部にもエコビレッジは存在する。50人～200人ぐらいの人たちが共同生活を営んでいる。研究前は平和な地球社会を達成するために環境にやさしい生活をしているいわゆる持続可能な生活をしている絆が強いコミュニティの詳細を探ろうとしていたが、本研究によりそれ以上のものを見出すことができた。

2. 目的と研究方法

グローバル化の終焉はすでに始まっているという時代認識のもと、世界各地で起こっているローカリゼーション（グローバルからローカルへの転換）によって各地域の自立性を高め、先進国による発展途上国の搾取をなくすことで「南」と「北」両方の平和と発展を進めている諸事例に注目した。特に、地域から起こっている環境・文化運動、エコビレッジ、アグロエコロジー、ローカルビジネス、エネルギーの地域自給、教育の変革などを軸とするコミュニティ再生のモデルとも言える事例を選んで、現地視察、フィールド調査や文献調査を行った。国内では、福島県南相馬、岐阜県石徹白、三重県鈴鹿「アズワン・コミュニティ」、岩手県盛岡および沿岸地域、和歌山県熊野、山口県下関、北海道長沼、余市、などを訪問した。海外では、インド・ラダック地方、インド・ダルムサラール「ディアパーク」、ブータン南東部、タイ北部チェンマイ・ノタオ村、エジプトのSEKEM、スロベニアの「サニーヒル」、ハンガリーなどを訪問。またイスラエル占領下のパレスチナにおける平和とエコロジー運動を視察した。非暴力平和運動の「ホーリー・ランド・トラスト」、アグロエコロジーを実践する農場などを訪問し、関係者へのインタビューを行った。

国際会議、セミナーなどにも参加した。その主なものに、「直接民主主義世界フォーラム」（イタリア・ローマ）、「しあわせの経済」国際会議（10月、イタリア・プラト／2月、オーストラリア・バイロンベイ）などがある。イタリアには元農水相の山田正彦氏と同行し、脱グローバル化を、様々な分野で研究し、実践する諸団体、諸個人と交流した。会議には、「しあわせの経済」運動の提唱者、ヘレナ・ノーバーク＝ホッジのほか、フランスの脱成長理論の先駆者セルジュ・ラトゥーシュ、インドの教育のローカリゼーションのリーダー、マニシュ・ジェイン、

元ブリストル市長ジョージ・ファーガソンらが出席した。バイロン・ベイの会議や講演会では、ヘレナ・ノーバーク＝ホッジやマニシュ・ジェインのほか、アメリカの経済学者でローカルビジネスに詳しいマイケル・シューマン、ブラジルの気候問題の研究者カミーラ・モレーノらと同席、交流し、議論した。

その一方で、国際NGO「ローカル・フューチャーズ」のメンバーとして、「エコミクス・オブ・ハピネス（しあわせの経済）」運動に参画し、さまざまな活動に参加しながら考えた。特に本研究期間の3年間毎年、「しあわせの経済」国際フォーラムの明治学院大学での開催に参画し、国内外からのエコビレッジやローカリゼーションを進める人々と交流を深めながら、毎年新たな動きを知ることができた。

また、エコビレッジを推進するGEN（Global Ecovillage Network）JAPANの講師としてエコビレッジをこれから設立しようとしている人たちのためのガイア・エデュケーションの講師も務めた。実際の参与観察として実際にエコビレッジ・コミュニティの活動に参加してメンバーと話をしたり自分自身の変化にも目を向けた。

なお、「エコビレッジ」と「トランジションタウン」の両方の名称を用いているコミュニティが多かったことで、エコビレッジという名称を用いないコミュニティについても事例の中で取り上げている。「エコビレッジ」の定義は「自然環境と共生し、地球環境への負荷を少なくし、自立性、循環性のあるコミュニティの場」（糸長浩司 2007）である。一方、トランジションタウンの定義は、『『エネルギーを大量に消費する脆弱な社会』から、『適正な量のエネルギーを使いながら、地域の人々が協力しあう柔軟にして強靱な社会、持続可能な社会への移行』（「NPO法人トランジション・ジャパン」HP）¹である。事実、エコビレッジを名前に取り入れているコミュニティもトランジションタウンを名称にしているコミュニティもほぼ同じビジョンを持って活動をし、両者の行事に同じ人が集っていた。

3. エコビレッジとトランジションタウンの概要

(1) エコビレッジ

デンマークでのコハウジングCo-Housing運動がはじめだと言われている。世界各国でも「お互いが支え合う仕組み」や「環境負荷の少ない工夫」を取り入れた暮らし方やコミュニティが同時にひろがっており、1990年代以降、「エコビレッジづくりの国際交流とネットワーク」としてデンマークを中心に動き出し、1995年GEN（Global Ecovillage Network）が設立される。エコビレッジは、1998年には国連の選ぶ持続可能なライフスタイルのすばらしいモデルとして「100 Listing of Best Practice」にも挙げられており、世界中の都市や農村約2万カ所に展開されている。日本では日本独自の文化、知恵、資産を入れたエコビレッジを「日本型里山エコビレッジ」と呼んでいた時もあるが、現在は欧州の先達エコビレッジを見学したこともあり、里山ではない場所でコモンリビング、コモンキッチンダイニングを中心にしたエコビレッジもあり、さまざまな形態のエコビレッジが存在する。

ただ目標は共通しており、3つのエコロジー（生態系、社会・経済性、精神性のエコロジー）の実現を目指す自立・完結・循環・持続型のコミュニティである。日本でも2016年にGEN

Japanが設立され、ネットワーク組織というより、エコビレッジを創設するための研修を行っている。

(2) トランジションタウン

パーマカルチャーおよび自然建築の講師をしていたイギリス人のロブ・ホプキンスが、2005年秋、イギリス南部デボン州の小さな町トットネスでトランジションタウンを立ち上げ、瞬く間にイギリス全土はもちろんのこと、欧州各国、北南米、オセアニア、そして日本と世界中に広がった（トランジション・ジャパンHP）²。パーマカルチャーとは、オーストラリア人のビル・モリソンやデビッド・ホルムグレンらが提唱した農的暮らしのデザイン手法でパーマメントとアグリカルチャーを組み合わせた造語である。トランジションタウンの考え方は、パーマカルチャーをまちづくりに応用したものと言える。日本では2008年にトランジション運動のNPOが設立されて、年に全国大会を年に一度行ったり地域ごとに合宿や勉強会を行い経験の分かち合いを行っている。明治学院大学でも全国大会を2度行っている。

トットネスでは、映画上映会、暮らしの基本的技術再習得講座、自然エネルギープロジェクト、地域通貨の発行など、さまざまなトランジション活動が展開された。その小さい市民運動は、関連団体、企業、行政などとも協働関係を築くまでになり、地域全体を巻き込む活動にまで発展した。トットネスの活動内容からもわかるように、始まりは、話し合いや映画上映会といった、市民レベルの小さな草の根活動である。それが、大きな社会変化を呼んで国際的な持続可能な社会へ移行するための国際的市民運動になりつつある。

日本のトランジションタウンはNPO法人トランジション・ジャパンがその活動を推進している。英国発のトランジションタウンを日本の地域で立ち上げることを目的に、2008年6月に発足。日本向け説明資料の作成、説明会の開催、トランジション・トレーニングの開催、2009年6月にはNPO法人の認証を受けた。その結果、日本のトランジションタウンは、2009年初めに、藤野、葉山、小金井の3地域から立ち上がり始め、トランジション・ジャパン発足から2年を経た2010年7月、日本でのトランジションタウン数は15となった。2011年3月の東日本大震災後はその必要性が高まったのか増え続けている。アドボカシー的活動も始めていて、2019年12月には以下のような「気候非常事態宣言」を出して、社会全体に訴えている。

「気候非常事態宣言」NPO法人トランジション・ジャパン

私たちは気候危機を阻止できる最後の世代です。

誰かが解決することではない、私たちがどう暮らしにコミットするのか、なにを大切に生きるのかを問われているこの問題。

地域や私たちの意識や実践が大きな鍵をにぎっています。

トランジションタウンの活動や、コミュニティに暮らす私たちにとっては、暮らし、地域、自然、コミュニティなどから、地球の危険信号、環境の変化を敏感に受け取っています。

トランジションタウンの活動は、地球規模の気候変動に待ったをかける有効的なアクションだと確信しています。

地球への配慮、人、生きものへの配慮が持続可能な未来へ繋ぎ、ともに生きることへの選択をしつづけるアクションになります。

統計上にはなかなか現れないかもしれません。

けれども、人間の意識ベースで変化が起こっています。小さな地域でも、仲間同士でも、たくさんの地域の点と点がつながれば、影響はひろがり大きなうねりになるでしょう。

そして、大きなムーブメントとして日本中がつながる、世界中がつながる。

トランジションタウンというすでにあるベースがそのムーブメントをさらに活性化させてくれるでしょう。

今こそ、つながりを取り戻し、地球とともに生きていきましょう。

今必要なのは行動です！いっしょにできることを増やしていきましょう！

4. 国内のエコビレッジの事例研究

調査したエコビレッジはいずれも、地域の特性を生かしながら「持続可能な社会」を目指し、「強固な人間関係」を築いていた。本報告では、日本の老舗エコビレッジと、開始して数年が終了したばかりの若いエコビレッジ両方の事例を記す。現在のエコビレッジは同居型と集落型（散居型）に分かれる。コミュニティの名称の後に同居型か集落型かを示す。

(1) トランジションタウン藤野 集落型（神奈川県）2009年～

日本で最初のトランジションタウンであり、エコビレッジでもある。エコビレッジの運動に共鳴して移り住んだ人がローカリゼーションを実践し始めた地域である。2008年6月にパーマカルチャーでつながった友人3名で準備を始め、2009年2月にコアメンバーを募って活動がスタートした。

当初は映画の上映会、保存食づくりやソーラークッカーづくりなどの単発的なイベントを実施していた。2010年からは地域通貨「よろづ屋」が発足した。ネットワークが広がり、現在では約200世帯約300名ほどが参加している。その後各テーマや興味に応じて、森部、藤野電力、お百姓クラブ、健康と医療などのワーキンググループが定着、成長を続けている。特に藤野電力は、全国でミニ太陽光発電キットの組み立てワークショップを開催したり、さまざまなイベントに自然エネルギーを供給するほど活動の幅を広げている。この電力事業で雇用も創出した。

このエコビレッジがある藤野は神奈川県北西部に位置する森と湖の町、旧藤野町（現相模原市緑区）は人口約1万人弱、新宿からJR中央線で約1時間の豊かな里山である。戦時中に疎開画家が移り住み、その後、芸術の町としてこの地に魅せられた芸術家の創造の場となっている。近年は、パーマカルチャーセンタージャパン、学校法人シュタイナー学園、里山長屋など、自然志向が高い人や、新しい暮らし方を模索する人々が移住してきた。もともと、集落ごとの自治会や、自然と暮らしに関わる市民団体活動もさかんな地域であった。

1) コミュニティ食堂があり、地元の食材を使った健康的な食事を提供している。

- 2) 羊を飼って「衣の自給」を志向している。
- 3) 地域鶏を飼って、卵を自給している。
- 4) シュタイナー学園名倉校舎があり、その創造的教育を求めて、親子が移住してきている。
- 5) ソーラーパネル付き移動図書館を持っている。
- 6) 地域通貨：藤野地区で経済が循環することを目的とした地域通貨「よろづ屋」は、一般的な紙幣ではなく「通帳型」を採用している。日々の困りごとや要らなくなったモノの物々交換など、地域通貨を通じた地域経済での互助コミュニティが機能している。
- 7) 自分たちの長屋を作って住んでいる。そこには「寄合スペース」がある。
- 8) 廃材を集めて再活用している。
- 9) やまなみ温泉があり、450円で疲れを癒せる。
- 10) 「芸術の森」と称するゾーンがあり、ギャラリー「シーゲル堂」、「(旧県立) 藤野芸術の家」など、精神的な安らぎの場所がある。
- 11) 日本の老舗エコビレッジとして、国内外から多く見学者が訪れている。またGENのエコビレッジ・デザイン教育研修も受け入れている。



(2) アズワンコミュニティ鈴鹿 集落型（三重県）2001年～

2001年から始まった「As One = 一つの世界」のモデル社会を実現する試みである。

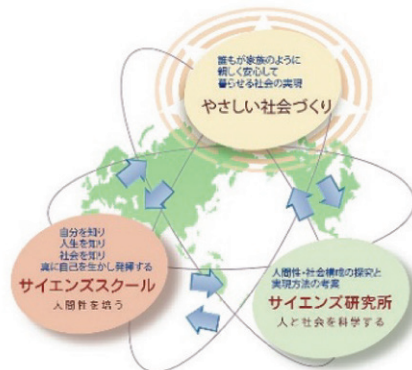
ジョン・レノンが“Imagine”の中の「The world will be as one」という一節から「国境も所有もない」という意味で命名した。世界は元々、囲いも隔てもない、すべてが「一つの世界」だという理念のもとに、人間自然界の中で全てのもとと調和しながら生きていくこと、そして、人間同士も、世界中の人と親しく、共に繁栄していくことを目的としている。「争いのない幸せな世界」を作ることを目指す。「世界に例のない全く新しいスタイル」と謳った都市型エココミュニティである。

- 1) 安心の中で、誰もが本心で生きる。血縁を越える。
- 2) 自然に調和していくコミュニティづくりを進める。
- 3) 規約や制約がない。義務や責任もない。
- 4) コミュニティの境界もないし、メンバーの規定もない。
- 5) 様々なコミュニティビジネスや各種の地域活動が、それぞれ自発的に展開され、関連し合い、つながり合い、調和しながら、一つのコミュニティを形成している。
- 6) 世界のエコビレッジやトランジションタウンなど、新しい世界を目指す各地のネットワークともつながっている。国際的エコビレッジ組織であるGENの日本支部の事務局をアズ

ワンのメンバーが担っている。

- 7) サイエンス研究所を併設し、人として成長する要素の解明や方法が考案され、常に現状の分析・解明・検討が行われている。「サイエンスメソッド」という独自の方式を打ち立てた。サイエンスメソッドとは、みんなの知恵を寄せて、ゼロから探究し、本質的なものを見出し、その実現をはかる方式で、どこでも、何にでも用いることが出来るという。モデルコミュニティづくりを試行錯誤している。この研究所から以下の7冊を出版している。
- ①サイエンスNoゼロ 創刊号 (サイエンスについての説明)
 - ②やさしい社会
 - ③人を聴く～心が通う話し合いとは
 - ④やさしい社会2～親しさと繋がる社会とは
 - ⑤as one ひとつの社会～やさしい社会をひも解く
 - ⑥サイエンス入門～人間を知り、人間らしく生きる
 - ⑦次の社会へ 人知革命＝サイエンスメソッド
- 8) サイエンススクールを併設している。サイエンス研究所で解明されたサイエンスメソッドは研修プログラムの内容や運営に反映され、試され生かされている。また、サイエンススクールで調べることを通して、人や社会の本質を探った人達の有志が、各地で「やさしい社会」の実現に向けて活動を展開している。週末研修等の短期研修をはじめ、国内外、韓国、ブラジル、フランス等から長期研修者も滞在している。

AS ONE NETWORK やさしい社会システム



「アズワンコミュニティ鈴鹿」のHPより³

- 9) 「おふくろさん弁当」という弁当ビジネスを展開している。その従業員は無給であるし、時間も従業員で話し合って決められる。他に不動産業、弁当屋、食料品店、学習塾なども経営している。
- 10) お金を介さないで食料品を含む物品をメンバー内で調達できる。

(3) 三角エコビレッジサイハテ 集落型（熊本県宇城市） 2011年11月11日発足

- 1) 日本各地から移住してきた27人（大人17人、子ども10人）木工職人、ファッションデザイナー、歌手、染織作家、パーマカルチャーデザイナー等が好き勝手に活動している。
- 2) 合言葉「お好きにどうぞ」、「やさしい革命」ルールもリーダーもいない
- 3) 空き家に住むので家賃はゼロである。
- 4) 「サイハテ基金」大人一人につき15000円を出し合い、共有スペースの修繕費に充てる。
- 5) 共有物：木工製作所、衣類の染色・縫製工房、（牛小屋を改装した）キッチン付きのイベントスペース、田んぼ・野菜畑・柑橘畑、ヤギ・鶏
- 6) 月1の住民ミーティング
- 7) 2016年の熊本地震で一時避難してきた人たちを約40人受け入れた。

(4) ウェル洋光台 同居型（神奈川県横浜市） 2009年～

住宅地の高台に1970年代に寮として建てられたものを2006年にシェアハウスとして使用し始めた。2009年にシェアハウスを退出した人が2013年に戻ってきて、シェアハウスの設備管理問題を解決していく中で提案したことでエコビレッジとして再スタートを切る。その際に鈴鹿のアズワンコミュニティのメンバーにアドバイスを受けた。見たところごく普通のシェアハウスとしか見えないが、ルールをなくすことで、自然体で楽しく暮らせるようになったという。

- 1) モットー：「フリーお金」贈り合いを楽しむ。
- 2) 24世帯31人 シェアハウスからスタート
- 3) ルール、担当制、ミーティング無し
- 4) 好きな人が、好きなことを、好きなだけやる。
- 5) 共有棚、お金を介さない物品が入手できるウェルマルシェを設けている。

(5) 笑郷まほろばの会 集落型（奈良県） 2016年～

日曜を除く週6回早朝6：30にラジオ体操で集まっている仲間で作った。同居はしていないものの、毎日顔を会わすことで急速に活動を活発に開始した。2016年に10月にドイツから来日する環境の専門家の講演会を受け入れ準備を始めた機に活動を開始した。豊富な自然環境を再認識するような学習を主体に活動を進めている。キーワードは①仲間づくり、②モノづくり、③まちづくり、④高齢者の生き甲斐づくり、⑤福祉・健康づくり、⑥環境教育である。

- 1) 自然を観察し、自然から学ぶ。：このエコビレッジのメイン活動であり、毎月自然観察会を行っている。「摘み草と摘草料理」、「初夏の野鳥」、「葉っぱはおもしろい」「どんな虫にであうかな?」「明神山まで歩こう」、「二上山付近の地層と石」、「二上山麓の薬用植物」「おとしだまの森を楽しもう」「樹と火」、「ウグイスの初音を聴きに行こう」等、野草、鳥、虫、石とあらゆる自然を詳細に観察して、地域の自然を学んでいる。
- 2) 世界や他の日本の地域での先進事例を調査研究する。：

他のエコビレッジを訪問したり、トランジションタウンの全国大会やしあわせの経済フォーラムに参加している。

- 3) 勉強会を開いて、生活圏の社会の問題・課題を共有し解決する。:公園、コミュニティバス、空き家の問題に取り組み香芝市議会や市長に提案をしている。
- 4) 昔から伝わっていて、途切れそうな技術を次の時代に伝える。:薪や廃材の利用。
- 5) 知恵を出し合い、資源やエネルギーを大切に使い、低燃費循環型暮らし方を見つけ出し実践すること。:ロケットストーブの導入。
- 6) 健康な暮らし方、健康になる工夫を実践すること。:毎朝集まって、ラジオ体操を行い、メンバーの安否を確認したり、健康講座を開いて医療者に依存しない健康づくりを進める。
- 7) 空き家を大きく改造して、「竹の杜」というコミュニティハウスを修繕改善し、活動の拠点とするとともに、空き家の利用の事例としている。庭には手作りの滑り台、ブランコ、鉄棒等の遊具があり、年中、生け花や絵画を展示して美しい空間を地域に提供している。
- 8) メンバーの得意なもので工芸品等を制作しバザーで販売し、収入としている。
- 9) まだ知名度は低いが、全国ネットワーク会合に参加した時の知り合いや、FBで発見した市外からの人も研修等に参加し始めている。ドイツ人専門家の来日の初年度以降も毎年、海外からも個人的つながりで訪問者がいる。
- 10) スーパーマーケットも病院もない土地であるために、高齢者や障害をもった人の搬送サービスを計画中である。

(6) 北海道エコビレッジ推進プロジェクト 集落型 (北海道) 2012年～

2009年2月にエコビレッジライフ体験塾を設立し、2012年にNPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクトとして再出発した。2012年3月 余市に定住して本格的活動を開始した。村というよりも、NGOとして活動している。大学生または若い社会人を中心とした人が短期間住んで学び、巣立っていく形である。ただし、北海道の他のエコビレッジ的生活をしている人々を遠隔でつなげている役割はあるかもしれない。つながりが強い北海道のエコビレッジとして家族だけで行っている「メノ・ビレッジ」がある。北海道伊達市にはエジプトの老舗のエコビレッジSEKEMで学んだ人が主催している研修と実践の場所があり、NPO法人「人智学共同体ひびきの村」はエジプトの老舗のエコビレッジSEKEMが主催しているオイリュトミーで研鑽を積んだスタッフが運営しており、その関連組織として虻田郡豊浦町にはNPO法人シュタイナースクールいずみの学校が運営する学校法人北海道シュタイナー学園もある。この学園はシュタイナー教育を取り入れて、エコビレッジの精神を受け継いだ教育が15年一貫で行われている。

- 1) 2014年より 余市エコカレッジを開講し、エコ的生活を学ぶ研修を主宰している。
- 2) 2016年より シェアハウス建設し、エコ的生活を体験する場を提供している。

5. 国外のエコビレッジの事例 (国外の事例も日本の事例からの通し番号を採用)

(7) SEKEM 集落型 (エジプト) 1977年～

1977年、砂漠に一本の木と一基の井戸を作ることから開始した。創始者は当初、無謀なことだということで周りから馬鹿にされた。現在はビジネス界でも成功している。

- 1) 農業、家畜、薬草づくり、有機綿づくりと大規模にビジネスを進めている。
- 2) SEKEM School と銘打ち、幼稚園、小学校、中等学校（日本の中学+高等学校）、職業訓練校を擁する。ドイツのシュタイナー教育、オイリュトミー教育が基本となっており、生徒のヒューマニティー（人間性）を育てる教育を行なっている。
- 3) 2017年にヘリオポリス大学を創設した。
- 4) 日本からも含め海外からのオイリュトミー教育の研修を行っている。
- 5) 海外からの見学も予約がいっぱいで、かなり前から予約しないと見学ができない。また、見学者のためのゲストハウスがエコビレッジ内に設けてある。
- 6) 毎週週末に入る前の木曜就業後の帰宅前にSEKEMビジネスの職員1500人全員があつまり意見を交換している。

(8) Smala Ecovillage Communities 同居型（スイス）1993年～

1993年、ブラジル人で欧州に移住してきた人が創設。レマン湖のほとりの景観が美しく列車の駅のそばで、最寄りの都市であるローザンヌやジュネーブへ出るのも便利な農村である。1993年から住人は何度も出入りがあり、国籍も2020年3月訪問時はブラジル人、フランス人、スペイン人、クロアチア人、イスラエル人と複数国籍であった。

- 1) 大量消費と大量生産を減らしたいと強く思う人たちが集まって住んでいる。
- 2) 大人はサラリーマンをしながら仕事量は減らして、簡単な畑もやっている、半農半Xというより半X半農というライフスタイルである。
- 3) 美術芸術を愛好する人たちの集まりであり、中央に小劇場があり、大変大事にしている。各部屋の呼び鈴もそれぞれ違ったオルゴールになっている。
- 4) (9) の Sunny Hill と比較すると対照的でゆるやかなつながりのエコビレッジである。

(9) Sunny Hill 同居型（スロベニア）2017年～

2012年から構想し、2017年に本格的に開始した。山奥に入っていくために、交通は不便である。また国籍がばらばらである。2018年度訪問時はクロアチア、スイス、フランス、イタリア、英国人が暮らしていた。モットーは贅沢な単純さ（luxurious simplicity）で次の4つの指針が壁に貼ってあった。

①合意 agreement of people、②空間の調和harmony of space、③あらゆる命の共鳴 resonance of life、④共存の喜び joy of co-existence

- 1) 一人一人の分担がはっきりしている。
- 2) 基本的な理念がしっかりしていて、それに基づいた活動がルーティン化されている。
- 3) コンポスト・トイレ、果樹・野菜栽培、パーマカルチャーといったエコビレッジ・デザイン

ン研修の「環境にやさしい基礎」はすべて整っている。

- 4) 完全なる食糧自給を目指す。
- 5) なによりも大切にしているのはメンバーの「絆」であり、毎日夜に会合を持ち、しっかり話し合う。食事の前に輪になる。列になって待っている間に肩もみをするなど日本では見ないスキンシップが多い。



毎夜行われる Sunny Hill の話し合い (2018年)

(10) あるエコビレッジ 村落型 (ハンガリー)

* 訪問時にメンバー間で問題が発生していたために名前は公表しないという約束をした。

2015年から活動を開始したエコビレッジである。ある大学教授が首都ブタペストと、エコビレッジを行き来しながら作り上げている。理念は他のスロベニアの Sunny Hill と同様で完全自給を目指しているが、経済的に難しいために、ほとんどの人がサラリーマンで街に勤務し、専業で農業をしているのは女性が一人であった。その女性にコミュニティの皆がお金を払い、他のメンバーは兼業である。その一人が過労になっている感があり、不平が爆発していた。

- 1) 完全なる食糧自給を目指す。
- 2) 精神的つながりを大切にする。
- 3) コミュニティの伝統や景観を大事にする。

6. 事例の考察

エコビレッジやトランジションタウンは大きく分類すると、メンバーと一緒に住む同居型とメンバーがそれぞれの家に住む集落型がある。当たり前のことであるが、同居型の方がより精

神世界に入り込む活動になっている。一方、集落型の方がより自由に活動ができ広がりがあるように感じる。どちらの型にしても程度の差はあれ、3つの共通した特徴がある。①メンバー内のコミュニケーションを大事にしていること、②しっかりした学びの場があること、更に③楽しんで活動している。

(1) メンバー内のコミュニケーション

スロベニアのサニーヒルは毎夜の会合での深い話し合いがメンバーの支柱となっている。また、43年目を迎えたエジプトのSEKEMは地球にやさしいビジネスを成功させている1500人のメンバーを抱える巨大ビジネス・エコビレッジであるが、それだけ大きくなっても毎週木曜日（エジプトでは週末に入る最後の平日）の1時間は戸外で円になって集まって話し合いを続けている（下の写真、GEN報告より）。



月1度しか定例会合を開かない三角サイハテや笑郷まほろばであるが、まとまった会合を持たないが、比較的人数が少ないこともあり、毎日顔を合わせた際に話す機会が多いことでコミュニケーションを取っている。定例会合をもたないウエル洋光台は一緒に食事をする機会が毎日あるということであるし、問題があがった時に時間をとってしっかり話しているということであった。

(2) 学びの場がある。

SEKEM以外はそれぞれノンフォーマル教育の機会をメンバーに提供している。内容は以下のように4種類がスタンダードであり、どのエコビレッジもGENが掲げてきた以下の4種類を参考にして学びのプログラムを準備していた。

① 世界観

まず、人間だけでなく、地球上のあらゆる生命体を人間と同等においている。自然への感謝、他人への感謝を持って生きている。自分自身が何を一番欲しているのか内省する機会を設けい

ている。長いスパンで物事を考え目標を設定しながら、目の前の事象に丁寧に対応して行っている。ホリスティック（統合的）な物の見方で優先順位を判断するために皆で話し合っただけで自分の考えが及ばなかったことを補い、その上で自分自身で考える時間を設けている。

② 環境

衣・食・住・働・遊など人間の生活に環境負荷の低い循環型のものを使おうと努力している。そのためにすぐに使える、暮らしに役立つテクニックから、コミュニティという単位で実現可能な技術、さらに自分たちで新しいオリジナルな方法を生み出している。その指針になる哲学がメンバー個人にある。

太陽光発電や風力発電を行ったり、エネルギーを共有することによる節電、有機農業の推進など環境にやさしい生活をしている。「エコ建築とその改修」「食物の生産」「適正技術」「自然の回復と災害後の再生」は特に日本のエコビレッジが考えている環境にやさしい技術であったが、2011年の東日本大震災からは自家発電を考えるエコビレッジが増えている。

③ 経済

社会システムをささえている経済システムを市場中心ではなく、人間が真にしあわせになる経済の存在を理解することで、現在主流の市場中心主義の経済が人を踏みつけていることに気づき、人間が真にしあわせになる社会システムを考え、実践している。現行の経済システムでなにが解決できてないかを理解すれば、新しい経済の仕組みをつくりだすことができる。（例：「社会的企業」「コミュニティ銀行と通貨」「貨幣不要の経済」など）

④ 社会

人間が一人で生きられないことを再確認し（そうしても人間は忘れやすいので何度も確認し）、自分も他人も両方を大切に作る居心地のよさをつくりあげ、ひとりひとりの能力が発揮され、誰もが安心して暮らせる社会を作り上げる。問題があるのが当たり前で、必ず解決できるという確信の基に皆で取り組む。リーダーシップだけでなくリーダーを支えていくフォロワーシップも意識しながら、意思決定のためにお互いのファシリテーションを行っている。

小さなエコビレッジでもそれぞれの年齢にあった学びの場を設けている。巨大な先達エコビレッジであるSEKEMはオイリュトミー教育を取り入れた保育園・幼稚園・小学校・中学校・高校で障害者も含めて入れて教育している。貧しくて学校に行けなかった人に対する年齢を制限しない識字学校や、職業訓練校も擁する。2009年にはヘリオポリス大学を設立し、大学でも芸術を必修とする人間性（Humanity）を高める教育を必修にしている。神奈川県「トランジション藤野」もシュタイナー教育を導入しており、且つ日本の公教育の学校として認められている唯一の例である。北海道のエコビレッジ「ひびきの村」ではエジプトのSEKEMのオイリュトミー教育の訓練を受けたリーダーが日本でオイリュトミーの訓練を主催していた。エコビレッジは現在の日本の教育の課題をも解決する手段になると感じた。

(3) 楽しんで行っている。

平和な社会に生きたい。その単純な気持ちが紆余曲折を経て「地域の自立」そしてエコビレッジに向かうことになった。エコビレッジは単に環境にやさしい生き方をしている場ではない。人生を楽しむ場であることを訪問したどのエコビレッジでも感じた。ハンガリーのエコビレッジも言い合いになったり、不満も飛び出していたものの、血縁関係がない人とゲストの前で喧嘩ができる近しい絆を感じ、喧嘩さえも楽しんでいるような気もした。どのエコビレッジも、暮らしの空間に①美しいもの・こと、②学び考える楽しさ、③健康的な笑いが絶えなかった。①は空気がおいしいこと、心を癒してくれる花や自然、音楽、絵画、茶わんであり、「助け合い」も私の中では「美しいモノ・コト」である。生け花や絵画等の壁には芸術作品や詩が書かれていたり、急に太鼓をたたく人がいたり、行事の前後にダンスや歌声が聞こえていた。②は「次はこんなことを学びたい」という声が聞こえたり、掲示板にさまざまな学習会が計画されていた。内容は語学、絵画、ダンス、木工、料理と多方面にわたり、その講師もメンバー内からや講師を招聘してと多岐にわたっていた。わたしたちが生きる社会は不思議な現象で満ちている。それを探求したり、何かを解決しようと考えて生きていくことが楽しそうであった。③は自分たちが生産したおいしいものを食べて、皆で楽しみながら運動して、よく眠るように自分で健康を維持していることである。それが健康的な笑顔につながっていたように思えた。

エジプト、スロベニア、スイスとエコビレッジを尋ねたが、どこにも美があり、面白い学びがあり、コミュニティで健康づくりを行っていた。

今回の研究で一番長く参与観察を行った「笑郷まほろば」は設立から4年であるが、上の3つの要素が活動から見取れるし、意識的に楽しい物を取りいれている。①もともと二上山の麓に輝く自然が広がっており、それを保全するだけでなく、アートのづくりで美を生活空間に加えている。②①の自然を保つ意味もあり、自然観察会など、専門家の助けを頂きながら学びを深めて楽しんでいる。③はもともと毎朝のラジオ体操がきっかけで集まった仲間で、これが脈々と続いている。「エコな暮らし」の良さや楽しさを共有することも楽しんで行っている。

7. 「しあわせの経済」世界フォーラム2017、2018、2019年開催

世界各国で行われていて、日本での開催が数年毎年延期になっていた「しあわせの経済」世界フォーラムが2017年によく行われた。3年続いて行われたこのフォーラムは初年度2017年の2日の内1日（白金校舎）および2018年（白金校舎）、2019年度（戸塚校舎）を本学で開催した。どの回もエコビレッジやトランジションタウンの関係者が多く参加していたので、全国各地からの参加者と情報交換ができた。また情報提供者を世界各地から招聘していたので、彼らとも意見交換することができた。2017年と2018年の同フォーラムは既に報告しているので2019年のフォーラムに絞って以下報告する。同時に複数の分科会が行われたので、参加したセッションの要約のみ記す。

(1) 世界のどんな地域でもローカリゼーションは生活を高める

中国、タイ、インドなどの思想と深く結びついた実践や、中南米、英国、紛争地であるパレ

スチナでの事例も地域性が色濃く反映された事例を通して、どんなところでもエコビレッジの活動が行われていることを再確認した。こういった多様な実践に通底していたのは、自然や人と共生する身の丈の生活文化を次世代に継承していくという価値観であった。小さいが世界中で進んでいるローカリゼーションが生活を高めている。

(2) 代替燃料

以下のような具体的な事例が発表された。

持続可能なエネルギーや水、物質の利用・再利用の実践、化石燃料を使わず、再生可能なエネルギーを利用、風力や太陽光ほか、有機ゴミや木屑などを利用するバイオマスエネルギー、水素を利用した燃料電池のコジェネレーティング・システム、雨水や排水の再利用を実践。上水→中水→下水の順に利用をし、バイオフィルターなどで水をきれいに再生、コンポストシステム（有機廃棄物を堆肥化して有効利用）、植栽不用物、残飯、野菜ゴミの堆肥化、トイレのコンポスト化、持続可能な住環境の実践、パッシブソーラー（太陽光の積極利用）、廃材古材の再利用など。

(3) 原発事故以後のエコロジーと地域

福島原発告訴団団長の武藤は福島第一原子力発電所事故の責任をめぐり、いまでも裁判で争っている。事故から8年が経った現在も、事故は全く終わっていない。「事故は私たち大人の世代が終わらせないといけない」と語っていたのが印象的であった。原発事故によってライフスタイルがいかに変貌してしまうのか、事故以前から、出来る限り電力会社に頼らない生活を実践していた人たちが、事故によって薪が使えなくなったり、畑が使えなくなったりした。原子力という科学技術が自然に与える影響の大きさを感じさせられた。

Friday for the Futureの岩野さおりは、日本における同団体の活動内容と様子を紹介。この活動の発起人であるグレッタ・トゥーンベリ、岩野自身も現役高校生である。また当日も来場者に署名活動と呼びかけており、次世代を担う若い世代が活発に活躍しているのは希望が持てた。一般社団法人ユナイテッドグリーン代表の山田周生は、被災地における「未来循環型地域づくり」の活動に取り組んでいる。彼はもともと、廃油から作るバイオディーゼル燃料を作り世界をまわるプロジェクトに取り組んでいたが、プロジェクトの最中に東日本大震災と遭遇したことがきっかけに、持続可能なコミュニティの作り方に取り組むようになった。

具体的には現在、岩手県釜石市に古民家をリノベーションしたECOハウスをつくっている。自家発電にも取り組んでおり、電力供給量は200%程度に達している。具体的なローカリゼーションが一部すでに成功している様子が伺えた。

最後に、城南信用金庫の佐藤隆美が同社の取り組みについて語った。城南信用金庫は、「脱原発宣言」をし、クリーンエネルギーの導入を目指すと発表した、ユニークな金融機関である。佐藤は、「社会・環境問題の解決こそ企業の目的」であると力強く語り、同社の取り組みを紹介した。昨今世界中の大企業が加盟して話題となっている「RE100」に日本企業で初めて加盟した。RE100に加盟するためには自社で使用する電力を100%再生可能エネルギーにする必要

があり、その難しさから日本企業では8社に留まっているが、この動きの今後の広がり期待が高まった。

(4) ローカリゼーションと教育—子どもを真ん中に社会を見据えて

この分科会では、高橋和也（自由学園学園長）、ムー・ソンブーン（INEB事務局長）、菅間正道（自由の森学園高校教頭）、田上凧（自由の森学園卒業生）、モデレーターの小野寺愛（そっか共同代表）が、「次世代の生きる力はどうにして育まれるのか」をテーマに話を繰り返した。

小野寺は「子どもを真ん中に社会を見据えて」について解説し「子どもを育てるには1つの村まるごと必要だ」と主張した。ムーは「教育は学校で行われるもののように考えられているが、教育は学びのプロセスであり、学びは最初の呼吸から最後の一息まで、生涯得ていくものである。」とし、経験すること全てが「学び」であるという考えであった。

最後に、「自分、仲間、社会への信頼を育むのに、どんな学びや経験が必要か」「こうした実践をどう実社会につなげていくか」という2つの問いを巡って登壇者の意見交換が行われた。菅間は、自由の森学園では、3つのR（Response, Rights, Respect）を大事にしているが生徒が「デイスル」という言葉をよく使うので、「デイスリスベクト」が満ちている社会を是正する教育が必要であるとした。

(5) グローバルからローカルへ ～日本における大転換への道筋

この分科会では、ヘレナ・ノーバグ＝ホッジ、山田正彦（元農林水産大臣）、堤未果（国際ジャーナリスト）、モデレーターの植草一秀（「オールジャパン平和と共生」運営委員）。グローバルからローカルへの変換の道筋が紹介された。

山田は「種子法廃止」が引き起こす将来にわたる問題を説明し、それに対して「種子を守る会」が、全国各地の自治体条例で種子を守ろうという動きをしていることを話した。堤からも、地方自治体レベルで行えるムーブメントがいくつも紹介され、今後私たちが、行政に対して働きかける必要とその道筋を参加者に伝えた。

植草は、「社会に埋め込まれていたはずの経済」が「経済が支配する社会」に変質するという本末転倒が生じていると指摘。「人間のための経済」が「経済のための人間」に入れ替わってしまっている。きつくて、汚く、危険な仕事に、誰も就こうとしないから、賃金は上げずに、外国人を輸入して、その、みなぎ嫌がる仕事を外国人にやらせるという政策も、「人間のための経済」ではなく「経済のための人間」という発想から来ると主張した。

(6) ローカルビジネス、ローカル経済

コミュニティを持続させる合意形成の仕組み、地域の伝統や文化を尊重し地域の経済的循環をはかる（地域の経済循環と支え合いを促進する地域通貨やコーポラティブ組織、地域住民の環境プロジェクトなどに対して無担保で融資する市民銀行やマイクロクレジットの利用）など、様々な視点から縦横無尽な議論が展開された。経済学者であり社会起業家でもあるマイケル・

シューマンはいかにローカリゼーションの経済的な恩恵が大きいのか、またどうすればローカリゼーションへ参加できるのかについて語った。私たちのお金がいかにグローバルへ流れ出ているのか、数字を用いて説明した。さらに会場の人々に「貯蓄をどう使っているか」「どの銀行に預金しているか」などの質問を投げかけ、ローカリゼーションの重要性を聴衆に訴えかけていた。

公益財団法人信頼資本財団理事長を務める熊野英介は、より広い視点から、今後経済がどのように変化し機能するのかについて語った。人々は経済的な価値観だけでものを選んでいるのではなく、例えばコンビニの飲料（価格は高いが、時間を買っている）のように、実はすでに社会的な動機からものを選んでいいる。また今までは市場的ニーズに対する商品がメインだったが、これからは社会的ニーズに応えるようなものが重要になるという主張は、例えば環境に配慮するエシカルファッションの登場などで、既に現実のものとなりつつあると感じた。

面白法人カヤックの代表取締役CEOを務める柳澤大輔は新しい資本主義のあり方を語った。ローカリゼーションを掲げるこのフォーラムで、資本主義はともすれば悪者として扱われることが多く、ローカリゼーションの対義語として用いられることも少なくない。しかし彼は、止めなければいけないのは資本主義ではなく「金融資本主義」だと語った。つまり金融資本だけを評価していることが問題であり、代わりに「社会資本」や「環境資本」が評価基準になれば、資本主義そのものは決して悪者ではない。現代経済の問題点を明確にするに留まらず、資本主義の競争原理を良い方向に利用することができる可能性までもが示された。「鎌倉資本主義」を実践している彼ならではの主張で、説得力があった。

8. 日本のエコビレッジの推進組織 GEN-Japan

GEN-Japanの主要な活動はエコビレッジ・デザイン研修「ガイア・エデュケーション」を行っていることである。ガイアエデュケーションは、2016年以前は「エコビレッジ・デザイン・エデュケーション (EDE)」と呼ばれていた研修で、持続可能なコミュニティ・デザインを促進する目的でつくられたプログラムである。ユネスコの認証を受け、日本でもここ10年行われているが、2017年度、エコびれっじ・ねっとJAPAN (GEN-Japan) の発足とともに新たな研修がスタートした。その研修に本研究グループのメンバー2人がボランティア講師として参加し、他の話題提供者やGEN-Japanのスタッフから、現在のエコビレッジの実際を知ることができた。また、エコビレッジを運営する上での態度や哲学を考察する機会にもなった。例えば、この研修では参加者どうしが以下のような話し合いを持つ。

- ・ 人間の本性とは？
- ・ お金を稼がなくても、尊厳を持って生きられるのか？
- ・ 報酬なしでも、意欲を失わないか？
- ・ 競争がなくても、進歩や発展は止まらないだろうか？
- ・ 義務や責任がまったく人々に課せられなかったら、社会は崩壊するだろうか？
- ・ 職場で、もし社員が自由に休みをとったら、ビジネスは失敗するだろうか？

- ・人はお互いに対立するものか？
- ・意見が異なる時、人はお互いに仲良くしないのだろうか？
- ・組織やコミュニティに、もしランクや権威の関係がなくなったら、壊れてしまうのか？
- ・すべてがタダになったら、人々は先を争って所有しようとするだろうか？

GEN-Japanは全国の新たにエコビレッジを作りたい人を対象としているが、他のエコビレッジもそれぞれの地域にあった研修を手探りで進めていて、学びの機会を外部に開いている。これはトランジション運動の「オープンソース」というノウハウや情報を共有すること。コミュニティ内での学びを設けるだけでなく、各エコビレッジがその経験を共有するために、研修コースを外に開いて、技術や知識を学ぶ強靱なネットワークを形成している。

その情報拡散もGEN-Japanが非公式でも担っている。

GENではエコビレッジと一緒に暮らす場に限定しないで、近隣や仕事場で、信頼と相互扶助で助け合うグループや、トランジショングループなど、これから新しく何かやってみたくなっている人のために、どんな一歩を踏みだしていけばよいかを紹介している。

9. 所感

(1) Vernacularな生活を取り戻す

3年間、エコビレッジを追いかけてきたが、一番大切なのは個々人が自分の納得する暮らし方を実現していくことだと感じた。エコビレッジの特徴は「どんな私であっても、ここでは受け入れてもらえる」、「どんな自分を見せても大丈夫」という安心感があることである。疎外感が深まったり、他人のことを気にして生きる「空気を読む」プレッシャーが蔓延している日本では自分に正直に生きることが難しくなっていたのではないかと。ありのままの自分であることができるという一見単純なニーズが高まっていたところに2011年の東日本大震災が起り、より多くの人々が「生活」を見直したことがきっかけで、「納得できる暮らし」の実現の場を探し始めた。

エコビレッジはイヴァン・イリイチのいうところのヴァナキュラー（vernacular）な生活を取り戻す運動である。ヴァナキュラー（vernacular）な生活とは「その地に根ざした固有の生活」である。またイリイチのもう一つの用語サブシステンス（subsistence）をイリイチの「シャドウ・ワーク」の訳者の玉野井芳郎の訳では『人間生活の自立・自存』で、「人々の生活の自立・自存を確立するうえの物質的精神的基盤のようなもの」としている。自分だけでは「納得する暮らし」を実現するのは難しいが、近隣の人々の助けを借りながら暮らすことに気づかせてくれたのがエコビレッジ運動なのかもしれない。近代産業化以前の社会には、その地の暮らしに根ざした固有の自立・自存の生活が存在していた。ところが、そのヴァナキュラーな生活は、近代産業社会の進展に伴い、徐々に破壊されてきてしまった。完全に消失したわけではないが、今回のコロナ禍で完全消滅するか、東日本大震災に続く第2の機会に、ヴァナキュラーな生活を見直すという選択に迫られている気がする。

(2) 積極的平和にコミュニティで参画する

エコブレッジやトランジション運動は世界平和をめざしたローカリゼーション運動でもある。コロナ禍前でも、国際社会は紛争・戦争社会となって、最大の環境破壊を起こしている。戦争は直接的暴力であるが、平和学者ガルトウングの定義によれば、環境悪化は行為主体がはいまいな「間接的暴力」、つまり「構造的暴力」であり、それを見過ごすことは「文化的暴力」となる。エコブレッジやトランジションタウンでの生活実践は「構造的暴力の不在」を目指すものであり、「積極的平和」が日々の行動で醸成される。今回のコロナ禍をただ対症療法で処して過ぎ去るのを待つのではなく、世界中の英知を集めて、持続可能な世界のデザインをしていくことで長期的に問題は解決するのではないか。

その担い手や行動サイズはやはり **Small is beautiful** ごとく、歩ける範囲のコミュニティである。これからの時代の鍵はコミュニティがどう自立しているかということではないか。自給自足をするといっても、すべて一コミュニティだけでできるわけではない。エコブレッジはネットワークを広げつつある。そういったネットワークの中で助け合っていくことが不可欠である。そんなコミュニティのひとつの形態として、エコブレッジやトランジションタウンが発生してきたのはグローバル化した国際社会で必要性が生じたからであろう。

(3) 教育革命運動である

エコブレッジには蕉風俳諧の理念の一つである「不易流行」の精神がある。いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも取り入れていく精神である。ローカリゼーション運動の中心人物の一人であるヘレナ・ノーバーク＝ホッジは1991年に“*Ancient Futures*”（邦訳「懐かしい未来」2000年）を執筆し、インドのラダックという地域が近代化によって壊されていく伝統的な生活を描いた。単なるノスタルジーではなく、グローバル化した経済に「開発」の負の側面が詳細に描かれている。その上で、西欧型「開発」の限界と問題点を明らかにし、その土地の自然と調和し、世界中の誰をも不幸にしない開発の仕方を伝統的な暮らしを再評価することに求めた。伝統的なものは大事であるが、既に破壊が進んでいる環境問題には新たな創造力を加味した知恵と行動が必要である。

文献でエコブレッジを調べていくと、「ルドルフ・シュタイナー」等の教育哲学が母体となっている組織が多いことに気付いた。その上で、エコブレッジを訪問すると教育改革の要素が見えてくる。

他の国の教育の内容を詳細に知っているわけではないので、日本の公教育を例に考えると、コロナ禍ひとつをとっても、それに適切に対応できるような教育がなされてきたのか疑問が起きる。コロナ禍はマスクや手洗いや外出を避けるだけでは根本的な解決にはならない。感染しても発病しなければコロナウィルスは敵ではなくなる。人間側の免疫が落ちていて発病し、最悪な場合は死に至る。昔から花粉の下で働いている人はいたが、彼らが花粉症にならなかったように、人間の外界物質への対応能力が低下している。それに対抗するためには生活改善が必要である。食生活の改善だけでなく、適度な運動や十分な睡眠、ストレスの除去等が必要である。日本の伝統的な栄養学の智恵や日本の宝であるラジオ体操を全国で復活できるような公的教育

が必要であると考え。コロナ禍で学校に通うことよりも、地域生活つまりヴァナキュラーな生活に戻る教育をそれこそ遠隔ツールも使いながら地域で行えばよい。

また現在の日本のフォーマル教育では「不易流行」とは言えず、生涯教育の場を地域が果たしていくことも必要かと考える。J.W.ボトキン『限界なき学習』（1980年）は40年前に出版されたが、現代社会に十分通用する。もともとローマ・クラブが『成長の限界』を1977年に出して環境破壊について世界に警告を出してきた。

エコビレッジで行われている一般大衆の生涯学習が環境を大事し、現在の問題に対応できる力をはぐくむことになる。ただの「環境教育」では社会の変化が激しい現代の問題に対応できない。大学でのActive Learningが叫ばれて久しいが、社会と連結していない大学内の座学では本当の意味の対応能力の養成は難しい。「成長の限界」をはじめローマ・クラブが示してきた「世界的問題群」（“アウトター・リミッツ（外的制約）”）に対して効果的な対策を取っていくことが果たして人間に可能なのか？社会の変化と人間の理解の間にあるヒューマン・ギャップを埋めることはできるのか？というのが本書の目的である。ボトキンは「インナー・マージン（内的可能性）」、つまり個々の人間が持つ潜在的な能力を学習によって刺激し、高めることで、こうした問題に対処できる、としている。しかし、そのためには現在の学習のありかたを変革していく必要がある。その実際例がエコビレッジの数々の勉強会で垣間見れた。地域に問題があり、それに対応するためにステークホルダーが学んでいるから真剣である。そういう真剣な大人の生涯教育の一貫として公教育の児童、生徒、学生も学ぶことができれば、「未来を見通す目」を養い、「主体的に課題に取り組む」資質や態度を身に着けることこそ本当のactive learningであると言えよう。エコビレッジで行われている学習会は、既存の知識や技術を教え習得する「現状維持型学習：Maintenance Learning」に変革をもたらす教育改革だと感じた。エジプトのエコビレッジSEKEMが幼稚園、小学校、中学校、職業学校のみならずヘリオポリス大学を設立していることは自然な成り行きであると言える。エジプトでは高校で成績順に医学部、工学部、文学部といった本人の希望とは違った大学専攻の決め方が普通であり農学部は成績の下位の高校生が専攻とすることが普通となっているが、ヘリオポリス大学では農業を大事にし、エジプト初の「有機農学部」を設立し、農学部の地位を上げつつあるという社会規範の変革というものに挑戦している。

10. 終わりに

43年前にエジプトのエコビレッジSEKEMを始めた創始者イブラハム氏（Ibrahim Abouleish）は既に亡くなっているが、その子息へのインタビュー（2018年に数回実施）によれば、設立当初イブラハム氏の挑戦を「無謀だ」と批判する人が多かったという。エジプトのような上意下達的社会の中で社会変革ともいえるエコビレッジ活動を進めるのは並大抵のことではなかったことは想像に難くない。日本は、エジプトに比べると自由度が高い社会である。また、幸いにも2011年3月の東日本大震災を経て、エコビレッジやトランジションタウンが増えている。こういった各地の取り組みにより、ローカリゼーションが進み、自然災害やコロナ禍といった

困難な状況に際してコミュニティが対応できるレジリエンスの高い日本社会、ひいてはレジリエンスの高い国際社会が醸成されることを望む。

〈注〉

- 1 <http://transitionjapan.net/> 2020年5月30日アクセス
- 2 同上
- 3 <http://as-one.main.jp/HP/suzuka.html> 2020年5月30日アクセス

〈参考文献〉

- アズワンコミュニティ有志『やさしい社会』サイエンス研究所、2012年
糸長浩司「地球環境時代のエココミュニティ」『オルタ』2007年11月号、アジア太平洋資料センター
I. イリイチ『シャドウ・ワーク——生活のあり方を問う』岩波書店 1982年
J. ガルトウング『日本人のための平和論』ダイヤモンド社、2017年
白井健二 白井智子『バーマカルチャー事始め』創森社、2015年
J. W. ボトキン『限界なき学習—ローマ・クラブ第6レポート』、ダイヤモンド社、1980年

〈参考URL〉

Global Ecovillage Network	https://ecovillage.org/
トランジション・ジャパン	http://transitionjapan.net/
トランジションタウン藤野	http://ttfujino.net/
アズワンコミュニティ鈴鹿	http://as-one.main.jp/HP/suzuka.html
三角エコビレッジサイハテ	http://village.saihate.com/
ウェル洋光台	http://well-yokodai.org/
笑郷まほろばの会	https://www.facebook.com/Ecomahoroba/
北海道エコビレッジ推進プロジェクト	http://ecovillage.greenwebs.net/
SEKEM	https://www.sekem.com/en/index/
Sunny Hill	https://ecovillage.org/project/sunny-hill/
Smala Ecovillage Communities	https://ecovillage.org/project/smala-ecovillage-communities